

満願寺の瓦の年代とその系譜

小林 康幸（鎌倉市役所）

はじめに

満願寺遺跡出土瓦の再整理を行い、合計 13,813 点（総重量約 2,500kg）の瓦を確認し、報告書にはそのうち 133 点を掲載しました。これらの瓦の整理から明らかになった瓦の年代やその系譜などについて報告します（集計表参照）。

1 瓦の分類

出土した瓦のうち軒丸瓦と軒平瓦については瓦当文様によって分類を行い、また丸瓦と平瓦については胎土（粘土）と叩き目によって下記のとおりに分類しました。

（1）軒丸瓦・軒平瓦の分類

・セット 1

軒丸瓦MAⅡ（蓮華文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅢ（唐草文軒平瓦）の組合せ。

・セット 2

軒丸瓦MAⅠ01（三巴文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅠ01（唐草文軒平瓦）の組合せ。

・セット 3

軒丸瓦MAⅠ02（三巴文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅠ02（唐草文軒平瓦）の組合せ。

セット 2 とセット 3 の違いは瓦当文様の珠文の粗密（間隔）の違いです。どちらのセットも同時期に使用されたと考えられます（第 1 図参照）。

（2）丸瓦・平瓦の分類

胎土による丸瓦の分類

A 類…精良な胎土（0.006%）、B 類…やや粗悪な胎土（99.992%）、C 類…陶器質（0.002%）

胎土による平瓦の分類

A 類…精良な胎土（1.3%）、B 類…やや粗悪な胎土（98.5%）

叩き目による平瓦の分類

縄の叩き目→満願寺Ⅰ期（少量）、格子の叩き目

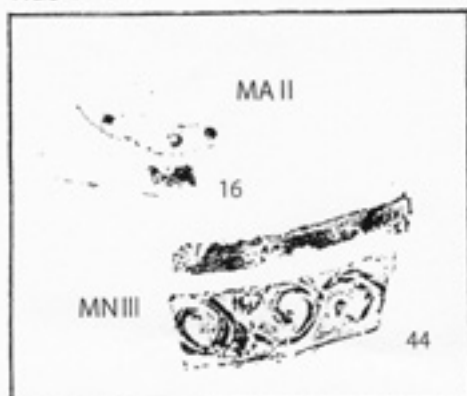
岩戸満願寺遺跡出土瓦集計表

点数は破片数、接合した破片は 1 点と数えた

種別	胎土分類 文様・調整分類	A（精良）		B（粗）						C（陶器質）		不明		計 点数	
				B		三浦		くすべ（三浦宮）							
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
軒丸瓦	MAⅠ 01					10	5.00							10	29
	MAⅠ 02					4	1.54	1	1.50					5	
	MAⅡ									1	0.08			1	
	不明					13	3.46							13	
軒平瓦	MNⅠ 01					6	2.67	2	0.16					8	29
	MNⅠ 02					3	1.82							3	
	MNⅠ 03					1	0.06							1	
	MNⅡ							2	0.50					2	
	MNⅢ									4	1.60			4	
	不明					3	0.75	8	1.39					11	
丸瓦		8	0.50	1	1.65	12	17.86	4	3.69	4	0.49			29	2665
	（報告書不掲載）	9	1.10	2344	406.03			283	26.50					2636	
平瓦	01 縄叩き	3	2.50	2	0.38									5	11080
	02 格子目叩き	1	0.15			13	27.35	3	1.67					17	
	03 格子目叩き			1	0.60	5	6.60	2	1.42					8	
	その他					1	0.90			5	1.08			6	
	（報告書不掲載）	149	26.60	8143	1390.95	824	189.90	1924	351.00			4	0.20	11044	
鬼瓦					3	1.58	1	0.32			2	6.03		6	
道具瓦		1	0.10	2	3.15			1	0.40					4	
計		171	30.95	10493	1802.76	898	259.49	2231	388.55	14	3.25	6	6.23	点数 13813 点	
粗計						13622	2450.80							重量 2491.23Kg	

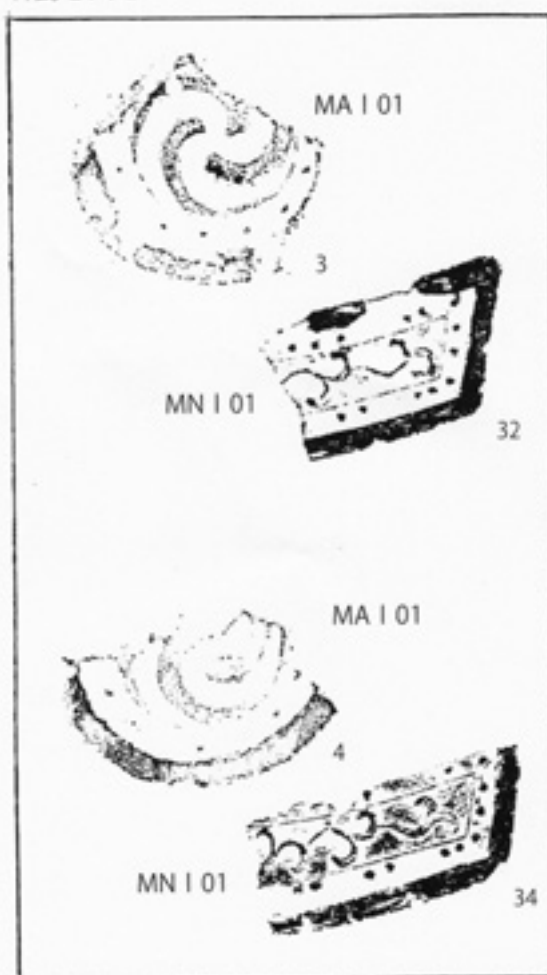
【集計表】 岩戸満願寺遺跡出土瓦集計表

軒瓦セット1

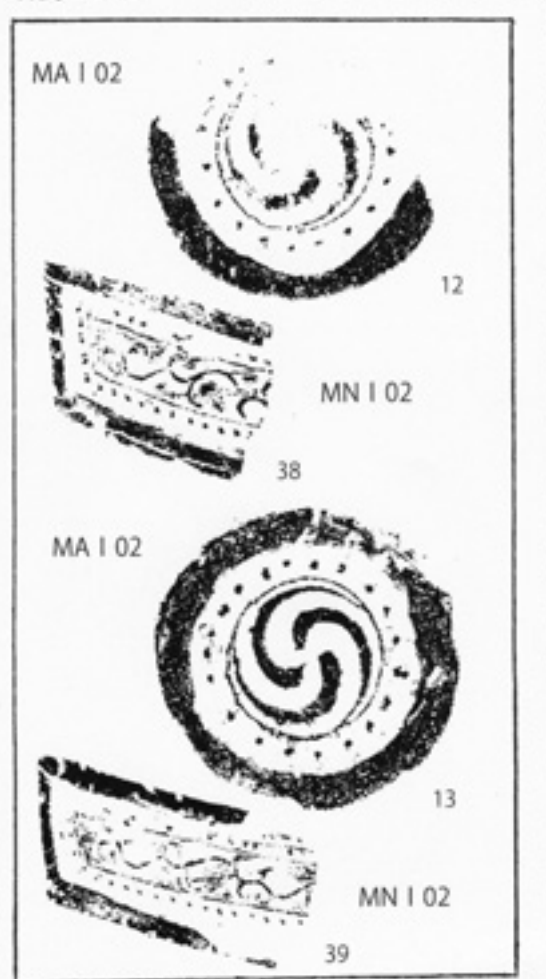


八事裏山窯出土の軒瓦

軒瓦セット2



軒瓦セット3



八事裏山窯系の系譜

【第1図】 満願寺遺跡出土瓦のセット関係

満願寺Ⅰ期の
平瓦凸面
MHA01

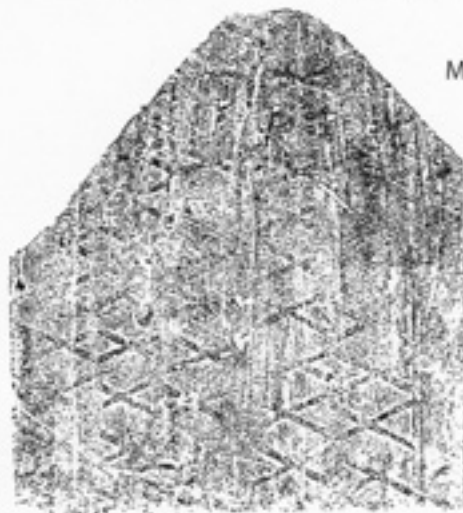


永福寺Ⅰ期の
平瓦凸面



88

MHB02



100

満願寺Ⅱ期の平瓦凸面



MA I 01

3



満願寺Ⅱ期の軒瓦



永福寺Ⅱ期の軒瓦



【第2図】 満願寺遺跡出土瓦と永福寺跡出土瓦の比較

→満願寺Ⅱ期（多量）

2 瓦の年代

分類した瓦の年代を考えるために、文献史料によって伝えられている満願寺の歴史を参考にしながら分類した瓦の年代を考えます。

満願寺Ⅰ期瓦➡満願寺の創建に使用された瓦。寿永三年（1184）佐原十郎義連。該当するのは軒瓦セット1と縄の叩きの平瓦。

満願寺Ⅱ期瓦➡満願寺の伽藍拡大。貞応三年（1224）。京都・泉涌寺の開山月輪大師俊仍（しゅんじょう：1166～1227）が佐原家連の三浦館に招かれ梵字を供養（『泉涌寺不可棄法師伝』）。この「梵字」が満願寺と考えられます。佐原家連は義連の子。該当するのは軒瓦セット2及びセット3と格子の叩きの平瓦。

このようにして推定した瓦の年代をより精度の高いものにするため、瓦の年代がはっきりしている鎌倉永福寺の瓦と満願寺の瓦を比較してみます（第2図参照）。

永福寺Ⅰ期瓦➡永福寺の創建。建久五年（1194）源頼朝による創建。平瓦はほとんどが縄の叩き目。

永福寺Ⅱ期瓦➡永福寺の修理。寛元二年（1244）～宝治二年（1248）。平瓦はほとんどが格子目の叩き目。

比較の結果から先に推定した満願寺の瓦は、鎌倉永福寺の瓦よりも10年程度古い、相模国で最も古い中世瓦である可能性が明らかになりました。

3 瓦の生産地

では満願寺の瓦はいったいどこで生産された瓦なのでしょう。瓦の胎土（粘土）の観察結果から考えてみます。

セット1とした軒丸瓦MAⅡ（蓮華文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅢ（唐草文軒平瓦）は表面に陶器にみられるような自然釉（うわぐすり）がかかっている硬質の瓦です。これらの瓦は愛知県名古屋市の八事裏山窯で生産された瓦と考えられます。つまり尾張国から相模国にもたらされた瓦です。当時、八事裏山窯で焼かれた瓦は、満願寺以外には永福寺をはじめとする鎌倉市内の数か所と伊勢原市内でしか発見されていません。極

めて限定的にしか流通しない特殊な瓦であったことがわかります。

セット2、3とした軒丸瓦MAⅠ01、MAⅠ02（三巴文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅠ01、MNⅠ02（唐草文軒平瓦）は地元（三浦半島地域）で生産された瓦と考えられます。残念ながらこれらの瓦を焼いた窯跡はまだ三浦半島周辺では発見されていません。

満願寺Ⅰ期の瓦とⅡ期の瓦では生産地が異なりますが、瓦の瓦当文様、特に軒平瓦の文様をみるとⅡ期の唐草文もⅠ期の八事裏山窯の唐草文に似た文様であることがわかります。つまり満願寺Ⅱ期瓦も質的にはⅠ期瓦と異なる瓦ではありますが「八事裏山窯系」の瓦ということが出来るでしょう。

4 瓦の系譜と満願寺の歴史的重要性

このように満願寺の瓦（特にⅠ期の瓦）は尾張と相模の関係を強く示す瓦です。満願寺の境内には現在も多くの瓦が埋もれています。過去の発掘調査が限定的な範囲で実施されたこともあり、瓦を葺いていた鎌倉時代の寺院建築の全体像はまだ不明です。見事な出来栄の本尊などの仏像の存在からも満願寺の繁栄ぶりは想像に難くありません。

創建以来の満願寺の繁栄は、この寺を造営した三浦一族、佐原氏が尾張や京都と強い関係性を有していたことの象徴であると考えられます。

すでに述べましたとおり、満願寺は源頼朝が鎌倉に建立した大寺院・永福寺よりも約10年早く瓦葺の寺院として建てられています。創建から40年ほどが経った頃にはさらに伽藍の拡大が行われていたようです。満願寺は当時の相模国を代表する大寺院であったと考えられ、その背景に佐原氏の仏教崇敬、文化摂取についての並々ならぬ熱意や尾張・京都との関係性・人脈、そして財力の大きさが窺われます。

これまではどうしても日本中世史のなかでは源頼朝や鎌倉幕府、執権北条氏を中心的なテーマとした研究が多くありましたが、鎌倉という場所を支えた周辺地域、相模国全体についての研究はやや低調な感じがありました。今後は満願寺や三浦一族、佐原氏についての研究が大いに進展することが期待されます。その意味で満願寺の瓦に関する研究がそのスタートになるのではないかと思います。